

安心して暮らす そのためにできること

在宅医療、そして療養生活を支えるさまざまな専門職。その患者に最適な医療や介護をするためには、患者の症状や健康状態などの情報を共有することが鍵になります。登米市医師会では、情報を共有し、よりよい在宅医療を提供するための取り組みを進めています。



米川診療所院長
登米市医師会病診連携委員長
木村 康一さん(63)

より詳細な情報を共有 そのためのツールが必要

自宅で生活する場合は、多職種の人たちが別々に訪問するため、情報の共有が不可欠です。そこで、登米市医師会では平成29年度から「みまもりファイル」の作成に着手。今年から導入しました。

米川診療所院長の木村医師は「患者さん一人一人に、より適した診療をするためには、より詳細に、より確実に情報を把握し、共有するツールが必要でした」と導入の理由を話します。

みまもりファイルには、もう一つの目的があると木村医師は話します。「患者さんが自分の最期をどうしたいかの意思確認をする役割もあります。これまでは意思確認できないことが多く、本人が望まない延命治療をし続ける場合もありました。患者さんとその家族が

望むかたちで最期を迎えさせてあげたい」と思いを込めます。

患者の情報を蓄積 緊急時の対応もスムーズに

みまもりファイルは、自宅での状況はもちろん、デイサービスやショートステイを利用する場合も持参し、心身の状態など、気になったことを細かく記載。健康状態の変化をみながら確認し合います。

本格導入に向け、昨年試験的に導入したのが、登米町にある小出医院です。院長の小出医師は「今までも、何かあれば連絡をもらい、その都度対応していましたが、その経過を各専門職の人たちで共有できていませんでした。このファイルがあることで、部屋の温度が低くなっていたとか、霜焼けができていたなど、生活面の情報も共有できるようになりました。また、緊



緊急時などは主治医以外の医師でも、すぐに患者の症状や延命治療の希望などを把握できる

急入院する場合には、症状や経過などが正確に入院先の病院に伝わり、より早く、より適した治療ができるようになります」と、緊急時にこそ効果を発揮すると話します。「そのときはいつ訪れるかわかりません。安心して暮らし続けるためには、自分のことを理解し、信頼できるかかりつけ医を見つけること。そして、どこでどう生活したかを、今のうちから家族で話し合い、意思表示しておくことが大切です」と呼び掛けます。



小出医院院長
小出 佳代子さん(49)

自分らしく、

この場所で――

頓所智也さんは、話すことはできませんが、啓子さんが病院ではなく、家にいたいかと聞くと、迷わず首を縦に振ります。

自分らしく、住み慣れた場所で生活するため、さまざまな取り組みが進められています。私たちが自身も当事者となり、考えていかなければなりません。

まずは、困ったときに相談できるかかりつけ医を持つこと。そして、何より私たち自身が在宅医療を支えるチームの一員となるために学び、助け合い、見守りできる関係を構築していくことが大切です。

どのように生活し、どこで最期を迎えたいかを家族や地域で話し合い、考える。それが、自分らしく安心して暮らせる場所へつながる道になるはず。

